

# 文 型 と 助 詞

——「は」「が」の用法を中心に——

森 田 良 行

## I 基 礎 文 型

文型は陳述を表わす部分によって第1次的規定がなされる。述部の性質によって、と言い替えてもよい。ところで、文法は形式面のみの問題ではない。人間の思考と結びついた現象であり、文法的分析はそのような思考現象(発想をも含めて)と関連づけて行なうことにより、言語の真の姿がとらえられると考える。発想や思考は具体的な「場」を前提として成立すると考えられるから、場との関係によって生ずる言語表現の型の違いは、形式的には文型の違いとして現われるはずである。

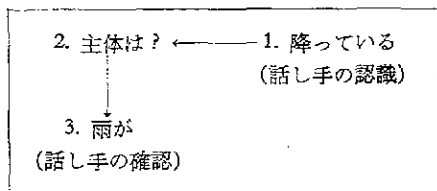
文型とは、文法学的に記述された文の形式的な分類によって弁別される型の類型ではない。表現の場と関数関係にある発想形式や思考展開の違いが、言語表現の面にもたらした特徴的類型ととるべきである。文型を以上のように規定すると、もっとも基本的な発想の型として、次の2種を区別することができる。

- a. 話し手と聞き手が融合関係として一体感的意識から、自己をとりまく場に対立し、場の現象を直観として言表する……現象文
- b. 話し手と聞き手とが対立関係にあるとの意識のもとで、現場・非現場の話題に対する判断を伝達する……判断文
  - ア. 発想に順行した発話……常態判断文
  - イ. 発想に逆行した発話……転位判断文

### 1. 現 象 文

たとえば「雨が降っている。」という言表があったとする。この言表は、

話し手自身が自己をとりまく場の中から、まず「降る」という現象を認識はあくする。次にそこから連鎖的に、その動作・行為を営む主体が何であるかを意識の中で問題化し、「雨が」という事実から自ら気づく。このように、心理的に先行する認識現象の主体を、新認知の概念として「何が」



と補足する言表を現象文という。現象文はこのような思考の手順を踏まえた言表であり、発想の出発点は場の中での現象そのものの発見認識である。

現象文は特に聞き手を予想しての発話ではない。なかばひとり言のように述べられる場合が多い。これは本来、聞き手を話し手と対立する関係として設定した発話ではなく、聞き手と融合関係にある一心同体的意識(見方によっては、聞き手は意識の外にあり、話し手自身のみの場)に立った言表である。聞き手への発言「ほら! こぼれてる、こぼれてる」のような叫びに近い言表も、伝達意識よりは現象の発見認識の端的表現にすぎない。現象文はガ格を用言述語が受けるところに特徴がある\*。この種の表現は、動作を営む主体何が当たる部分が表現意識の最終到達点であり、「～が」によって示される主体はあくまで個別的・具体的事物である。その主体提示に表現の目的が存し、強調箇所ともなってくる。

現象文は眼前に展開する現象、すなわち場面をそのまま表現する文である。現象文の特徴として次の諸点が挙げられる。

- (1) それ自身が1つの場をもつ表現であり、それゆえ新しい場を持ち

\* 三尾砂氏は「ガ+動詞述語」のみを現象文とし、その動詞も終止形は少ないと述べている。永野賢氏は、ガ主語の場合、動詞現在形も含めて、形容詞・形容動詞述語の文も現象文に含めている。

\*\* 用例は主として早大語研日本語中級教科書(旧版)から採った。( )内のⅠⅡⅢは第Ⅰ部、第Ⅱ部、第Ⅲ部を表わし、算用数字はページを表わす。なお、作例は表示を欠く。

出すとき、たとえば冒頭文などに多用される。

○ある森にライオンの王様が住んでいました。(I 57\*\*)

(2) 文の連鎖の場合は、新しい場への転換となり、それまでの文脈の発展方向とは関連なく、孤立的・異質的な場を持ち出す。文同士が互いに因果関係にあるのではない。

○この道は車も通れる。しかし泥んこ道だ。秋草がいっぱい咲き乱れていた。(II 34)

(3) 眼前に展開する場面をそのまま表現する叙述であり、単なる直観作用・情意作用による表現である。

(4) 「今ここで」という時間・空間の制約下にある表現である。それゆえ戯曲の場面説明、ト書きなどに多用される文型でもある。現象文でしるされることにより、舞台上の場景を、作者の視点に立って作者とともに逐次認識していくという心理過程をたどる。(融合型)

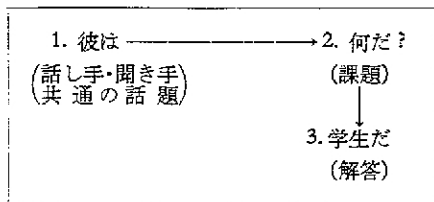
(5) 現象文は、動作を営む主体を何ガと提示する文型ゆえ、必ず～ガが文の主語として立つ。

## 2. 判断文

聞き手を話し手と対立関係にすえると、伝達意識が強まる。と同時に話し手の判断を示さなければならない。対聞き手意識のもとに積極的に事物を話題としてとり上げることから出発する表現が判断文である。そのとり上げ方の違いから、これを2種に分けて考えるのが便利である。

### a. 常態判断文

たとえば「彼は学生だ。」の言表は、まず「彼」を話し手・聞き手の既知観念という前提のもとに話題とし、それに対する話し手の判断を聞き手



に伝達しようとする。「彼は何だ / どこだ / だれだ / どんなだ?」という疑問を提起し、それに対する解決として「学生だ / あすこだ / 田中さ

んだ / 立派だ」という解答(陳述判断)を下す。判断文における「何ハ」は、話し手・聞き手共通の話題であり、以下の解説に対する課題でもある。それゆえ、「何ハ——何ダ / 何ハ——ドンナダ」と本来分離した主語述語の二部構成からなる発想形式(構文)である。

○「あなたの頭はすばらしい」とか(II 37)

○「頭がよい」ということばは(II 37)

ガ文型には分離意識がない。判断文の主題「何ハ」が課題場の提示であるところから、「鉛筆は」という言表は「鉛筆は?」の質問意識に根ざし、当然「どこにあるの? / 机の上にある / ない / きらいだ」等、種々の解答が予測され、要求される。

○ほかに悪くないウソの例は... (II 3)

「ハ」による判断文は、発想の出発点たる主題の提示「何ハ」のみで十分察しのつく質問文なのである。ハ文型の判断文は、二部構成をなすところから、課題一解決を2人の会話のやりとりで完成させることすらあるのである。現象文では、「何ガ」で切った場合、言いさし表現として十分汲みとれない。「それがどうした?」と疑問が残る。発想の出発点たる眼前の現象がまだ叙述されていないからである。合づちとして発する「何? 鉛筆が!」も同様で、聞き手に対する質問ではなく、独話「鉛筆が(折れた)」等の言いさし意識である。

ガ文型・ハ文型の発想手順の違いは、表現の中核部、強調部分の違いとして現われる。ハ文型の判断文は 題目の解説部分、質問の解答部分たる「何ダ / ドンナダ」の述部に表現意図があるのは当然のことである。しかも、題目と解説との連合は話し手の判断によって行なわれ、それが真か否かは話し手の主観の責任となる。

○このバスの旅は岩山を見る旅でもあった。(II 36)

○アイススケート場は不良少年少女のたまり場であると言った。(II 57)

○ふるさは遠きにありて思ふもの。(犀星)

○春は曙 / 夏は夜 / 秋は夕暮 / 冬はつとめて(枕草子)



いずれも話し手の主観の中で組み立てた判断である。

話し手の主観の責任において下される連合が社会的・伝統的に認められた判断となると、1つの人生真理として、ことわざ・慣用語へと発展する。

○男は度胸、女は愛嬌 / 花は桜木、人は武士 / 縁は異なもの味なもの /  
明日は明日の風が吹く / あとは野となれ山となれ

「～ガ」が現場に則した個別的・具体的事実であったのに対し、「～ハ」は「～トイウモノハ / ニツイテイエバ」と題目として取り上げる意識、一般的事実・恒常の真理となりやすい。

○こともが扁頭腺の手術を受ける(II 5)

これも「こどもは」に変えると一般的事実や社会習慣に変じてしまう。ハ文型は時間的關係や区別を離れ超絶した表現として、恒時的な真理や一般的事実に関する判断の叙述として用いられる。

ハ文型が非現場における判断の主題を共通の題目として取り上げる意識から、「他はどうか知らないが、これは... / 他はそうではないが、これは...」という対比意識が潜在的に伴う。主題「何ハ」に限定意識が加わると強勢強調となり、対比意識が表立つ。常態判断文は強勢・弱勢によって対比意識の有無(無を不問意識とする見方もある)が生ずる。両者の区別は単文の場合、形式面に現われない。話しことばの場合は強勢の「ハ」に卓立のイントネーションが現われるが、複文の場合は「花は桜木、人は武士」のような並列対比形式をとるものにしか特徴は見出せない。文法的には、主題提示の弱勢ハ文型は連体修飾句として立ち得ない。ガ文型に変形する。対比強調の強勢ハ文型なら連体修飾句として立ち得る。「子供は見たがる番組」とは言えないが(「子供が」に変形する)、「(おとなは見たがらないが)子供は見たがる番組」なら成立する。

常態判断文における「何ハ」は、話し手が聞き手に対し言表すべき主題を提示し、これを発想の出発点として疑問の場(または課題の場)を設定することである。「何ハ」で示した題目について、次にどのような判断を下し解説を施すかは話し手の自由である。その題事物を行為や属性の主体

として扱おうと、行為の目的や対象として扱おうと自由である。それゆえ述語が動詞(または動詞的意図をもつ体言)のときには行為の対象事物としても扱われ、「～ハ」は必ずしも主語になるとはかぎらない。対象語ともなる。(動詞的意図をもたない体言述語、形容詞・形容動詞述語の場合は必ず主語となる。)

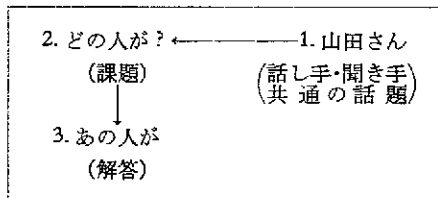
○帰りは小海線へ出てみるのもおもしろい。(II 32)

○昼は外で食べますが、(I 21)

行為主体は「私たち」のはずである。「水は汲んである / コーヒーは飲まない / 私はうなぎ / 彼は教室だ / あしたは引っ越しだ / 日曜日は休養だ」など。

#### b. 転位判断文

「山田さんはどの人ですか?」の質問に対し、「山田さんはあの人です。」と答えれば常態判断文として同一文型による返答となるが、判断文はしばしば倒置されて、「あの人が山田さんです。」のようにガ文型をとることがある。この場合「山田さん」は話し手・聞き手にとって共通の話題であるから、課題は「どの人が?」であり、「あの人」が解答となる。「この人でも、その人でもない、あの人」が」とガ文型をとることによって排他意識・限定意識が強まる。解答部を先に出し、排他意識を示すことによって強調効果を高めているわけである\*。



a. あの方は山田さんです。

b. あの人が山田さんです。

a は「あの人」が了解ずみの話題であり発想の出発点であって、表現意図は解決部「山田さんです」の提示にある。b はそのまったく逆の発想に

\* 「山田さん」が共通話題であることから、「私が山田です」の言表には「皆さんご承知の」の意識が生まれる。

立ち、「山田さん」が共通話題で発想の出発点となる。表現意図は解決部「あの人が」にある。発想の手順は思考の流れに逆行するわけであり、aの常態判断文「課題—解決」の倒置形式として転位判断文(略して転位文)と呼ぶべき文型である。

転位文は「解決—課題」の順序をとるから、解決部「あの人が…」の言いさしのみで、もう十分伝達目的は果たされているわけである。この点と同じガ文型であっても現象文と異なるところである。現象文は話し手自身が現象を受動的に認識することに発想の基本があるのに対し、転位文は対聞き手意識において事物を話題として能動的に取り上げるところに発想の出発点がある(対立型)。同じ「雨が降っている」でも2様に解釈ができるわけである。転位文なら、

降っているのは雨です→雨が降っている

で、「雪ではない、雨が」と排他意識になり、強勢となる。

「何が何ダ。」の転位文の場合、2つの「何」の意味範疇に制約が起こる。「彼が先生だ」は可能だが、「先生が彼だ」は通常成立しない。「何ダ」は上位概念でなければならない。ハ文型の倒置ではあるが、「彼ハ先生ダ→先生ガ彼ダ」とはならない。

A ハ B ダ。……上位概念は B

B ガ A ダ。……上位概念は A

ただし、常態判断文の転位形式ゆえ、主語 B は必ずしも述語 A の属性主体となるとはかぎらない。皆で注文した種々の料理を前にして「うなぎがぼくだ。」と言えば転位文である。「ぼく」は「うなぎ」の上位概念ではない。

また、転位文は排他意識として解決部を強調する文型ゆえ、解説や言いわけ、理由説明に格好の表現形式である。それゆえ述部を「のです/んです」で結ぶことが多い。

○菓子屋の損害は 1000 円である。これが、この考えものの正しい答えなのである。(I 50)

○総合サービスセンターがわたしたちのねらいなんです。(I 29)

以上見てきたように、ガ文型・ハ文型は、ガ・ハの助詞の部分にのみ限定して比較すべきではない。両文型の発想の違いにまでさかのぼって対比すべきものである。まとめてみると次のようになる。

場の構成 (文の種類)		融合型 現象文	対立型 判断文
発想の形式 (文型)			
順行形式 ハ文型	弱勢		常態文(不問)
	強勢		常態文(対比)
逆行形式 ガ文型	弱勢	現象文	
	強勢		転位文(排他)

## II 文型提出の順序

最も基本的な文型としてガ文型・ハ文型に2大別したとき、日本語教育の入門期学習としては、どちらの文型を先に与えるほうが好ましいか。これは文型の提出順序の体系との関係や、学習効率の問題などとも関係してくるが、一般にはハ文型からはいるのがふつうとなっている。常態判断文を先に与えることに何か利点があるのだろうか？これには次の6つの理由が考えられる。

### 1. 不定詞の学習にはハ文型を早く教えておくことが好ましい。

不定詞が述部に来る(述語となる、または述語中に含まれる)のはハ文型の常態判断文である。話し手・聞き手の既知の題目を「何々は」と提示し、それが何なのか、どうなのかを述部で質問する順行形式だからである。

いっぽう、不定詞が主部に来る(主語となる、または主語句中の修飾語となる)のはガ文型の転位判断文である。(現象文は不定疑問表現を持たない。)既知の題目を述部で提示する予定で、課題「何が/どれが」等をまず主部に持ってくる逆行形式だからである。

さて、「何が…ですか?」「だれが…ですか?」の積極的発言を先に

学ぶより、「...は何ですか?」「...はどこですか。」の消極的質問、「...は何々です。」の受け手の立場を先に覚えたほうが実生活の役に立つ。さらに、ハ文型の常態判断文は

○鈴木先生のお宅はどこだったっけ。(I 25)

と非現場の事物も題目にできるだけに、用途が広い。

○どこが鈴木先生のお宅ですか。

の転位文は現場の話題にしか用いられず、それだけ使用範囲が狭い。

「不定詞・ガ・～」「～・ハ・不定詞」の法則にはずれる場合がある。

○天気予報に興味を持ち始めた動機はなんですか。(II 62)

ハをガに換えると、述部が聞きとれなくて聞き返す意識となる。また、「1回や2回の欠席が何ですか!」というのがある。これは「欠席がどうしたというのか。さして問題でない」の意で、反論意識となる。もはや不定詞とは言えない。このほかに、問い返す「何曜はいいんですか?」\*度忘れの「何はどこですか?」慣用表現として「何が何だかわからない。」「何

2. 指示語の学習には、ハ文型を早く教えておくほうが都合がいい。

コソアの指示は、文脈指示より現場指示のほうが具体性があり、現場に則しているだけに、早く教えるべきである。現場指示は話し手・聞き手にとって既知のことゆえ、題目となりやすい。了解ずみの事物ゆえ、多くハ文型となる。

○それは何ですか? / これは地図です。

また、述語にして

○地図はこれです。 / 事務所はそこです。

とコソアの差し替えによって文型練習が行なえる。ガ文型によってコソアの練習をしようとすると、転位文

---

\* これらの例については松村明、三上章氏の論文にくわしく論じられている。

○これが桜です。/それがいい。/あれがほしい。

と強勢になってしまい、一般的表現として練習できない欠点がある。現象文ではコソアが現われにくい。したがって、コソアのガ文型では動詞述語が出にくく、「あれが鳴るのです」のような「のです/んです」の転位文となりがちである。また、修飾語として用いても、

屋根が漏る+この → この屋根は漏る

のように、コソアを用いることによって了解事物となってしまう、ハ文型に変じてしまう。そのほか、「桜がこれです」のような述部にコソアを入れる表現も成立しにくく、ガ文型によるコソアの表現はきわめて限られた場合のみに限定されてしまう。

3. 疑問文の練習には、ハ文型からはいるほうが有利である。たとえば、

○それは何ですか? → これは地図です。→それはあなたの地図ですか? →はい、これは私の地図です。

質問→答→質問…と会話のやりとりによって文脈を展開させるにはハ文型でなければならぬ。「何ハ」は了解ずみの話題提示ゆえ、次の会話へと指示語などを利用して鎖式に繋げていくことができる。ガ文型では、現象文は孤立的话题・新しい場の提示ゆえ、話題の展開がむずかしい。転位文は

○あなたが田中さんですか? →はい、私が田中です。

と文脈に区切りをつけてしまい、話が展開しにくい。しいて展開させようとすれば、

○はい、私が田中です。→田中さんはいま何年生ですか?

とハ文型になってしまう。会話のやりとりはハ文型一本でおし通したほうが問答がスムーズに進み、かつ文型上も学習者に無用の混乱を起こさないですむ。

4. モ文型への発展はハ文型を前提としてはじめて可能となる。「～モ」の累加表現は、ハ文型の習得後ただちに学習させなければならない。

○兄は大学生です。弟も大学生です。

題目「兄は」に対する解説として「大学生です」と答える。課題に対する多くの解答「大学生 / 会社員 / 役人 / 教員…」の中から1つを選んだわけである。この解答と同じ解決が得られる題目が次に来るとき「～モ」となる。

S ハ Pダ。 S' モ P ダ。

もし異なる解答となる場合には、連立対比の判断文として強勢のハ文型となる。両文の意味関係は逆接となる。

S ハ P ダ。 シカシ、S' ハ P' ダ。

○男は孤独に耐えられるが、女性はそうはいかないのだ。(II 82)

この場合、P, P' は同一範疇の概念でなければならない。

○太郎は会社員だが、花子は優等生だ。

とは言えない。ハ文型は本来、連立対比の可能性を秘めており、先行文に対しては逆接関係に立つ。

○「いや、わたしは寒くないんだ」とつぶねる。(II 7)

には、「あなたはどうか知らないが、しかし / あなたは寒くないだろうけれども」等、題目においては対比意識が、判断に対しては逆接意識が宿る。それに対して「私も / 彼も」と共通意識が働けば、同一判断の累加となる\*。モ文型は、対比判断文と P (述語)を共通にするところに成立する文型なのである。

○これは私のです。あれも私ののです。

はじめに転位文が来て

○これが私のです。あれも私ののです。

とさせるのは「モ」の本来の機能にはずれる\*\*。モ文型の練習は、ハ文型とかみ合わせることなしには行なえない。

5. 否定表現の練習はハ文型で行なうほうがよい。

\* 対比意識に根ざす逆接は順接に対応しない。累加に対応する。

\*\* 転位文には「も」が対応しないが、現象文なら対応する。「雨が降っている。風も吹いている。」

そもそも否定判断「～ではない／～しない」は、既定の題目があって始めて成立する判断である。「学生じゃありません」は題目「だれそれは？」を前提としなければ成立の意味がない。それゆえ否定判断はハ文型の常態判断文となりやすい。雨が降っていないにもかかわらず「降る」作用を想定して、

何が降っていない？ → 雨が降っていない。

の発想は普通ではない。強勢の転位文では、述部に否定を含めると不自然になりやすい。

○私が学生ではありません。

「学生」のような上位概念は特殊な情況として成立もするが、下位概念の語、たとえば

○私が田中さんではありません。

固有名詞「田中さん」では成立しない。ただし単文の場合のみで、複文なら

○あの人が田中さんでないのが残念だ。

のように成立し得る。この点については次章で述べる。さて

S ハ P ダ。 S' ハ P デハナイ。

S ハ P デ、P' デハナイ。

の対応は成立するが、

S ガ P ダ。 S' ガ P デハナイ。

S ガ P デ、 P' デハナイ。

は成立しない。しいて否定表現を続けたいなら、ハ文型に変えなければならない。

○あの人が田中さんだ。この人は田中さんではない。

ガ文型では対比判断が生じないからである。

否定表現がハ文型となりやすいのは、「ハ」の対比判断・話題の強調意識に根ざしている。このことは次の例を見れば明らかであろう。

雨が降っている／雨は降っていない



肉を食べる / 肉は食べない  
 学校へ行く / 学校へは行かない  
 教室にある / 教室にはない  
 教室で読む / 教室では読まない  
 窓から出る / 窓からは出ない  
 駅まで行く / 駅までは行かない

6. 中立的主格の文を学習するにはハ文型で行なうほうがよい。

弱勢、強勢、どちらの表現が実生活上有用で重要か、日本語教育においてどちらを早く教えるべきかは、論ずるまでもない。オーソドックスな弱勢表現を学習させるには、ハ文型のほうが都合がよい。用言述語の文は、単文の場合、中立的な主格または主題を表わす弱勢表現にはハ文型・ガ文型のいずれも用いられるが、体言述語の文ではハ文型しか用いられない。ガ文型では強勢表現となってしまう。

	ガ 文 型		ハ 文 型	
	中立的な主格の文 (弱勢の文)	排他限定主格の文 (強勢の文)	中立的な主格主題の文 (弱勢の文)	対比強調の主格主題の文 (強勢の文)
体言述語の文	—	転位文	常態判断文	常態判断文
用言述語の文	現象文	転位文	常態判断文	常態判断文

つまり、ガ文型からはいっていくと、体言述語の文を扱おうとすると、どうしても強勢の転位文を扱わねばならなくなる。ハ文型で行けば、用言述語の文であろうと体言述語の文であろうと弱勢一本で練習が進められ、強勢の文はガ文型学習の段階後まで与えないですむ。裏返して言えば、ガ文型からはいる立場は、用言述語の文とくに動詞述語の現象文を重視するあまり、体言述語の文を犠牲にする立場でもある。弱勢のオーソドックスな表現として動詞述語の文中心に練習が進められ、体言述語の文は強勢の文として従に回される恐れがある。

しかし、動詞は格支配が複雑、テンスやアスペクト、受給表現、受身使

役表現などがある学習すべきことが多い。できれば動詞を扱いたしたら動詞一本でカリキュラムを組みたい。また、動詞述語の文は複文構成が複雑で、ハ・ガの用法が構文と深い関係をもっているのも、単文から複文へと進む段階に動詞述語の文を集中的に学習させたほうが学習効率がいい。このように考えてくると、動詞述語はできるだけあとに回したほうが都合がよく、動詞を主眼としているガ文型を無理に先に出すことはあまり得策でないことに気づく。

### III 複雑な文型と「ハ・ガ」の用法

複文におけるハ文型・ガ文型のからみ合い、それによって生ずる構文の問題は、ハ・ガの選択の問題へと発展し、さらに文意のとり方の問題や、意味面から見た文成立の可否の問題へと進む。ここでは問題点を整理する意味で次の2点について検討する。

(1) 複文における先行の格助詞ガをハに置き替えることができるかどうかの問題。これには a. ニュアンスは違ってくるかもしれないが、ハの置き替えが可能で、しかも構文上も異同をきたさない。b. 置き替えは可能だが、異なる構文になってしまい、それゆえ全体の文意が違ってくる。c. ハへの置き替えは不可能。

(2) 複文における展開部の前後で、主体の入れ替え(主語の転換)が可能か否かの問題。

複文における従属句としては、独立句、主語句、連体修飾句、連用修飾句、および述語句が考えられるが、これらにおける S—P 関係(主語・述語関係)を表わす助詞が問題となるわけである。本稿ではハ・ガの使い分けを、S—P の従属句として種別ごとに整理する立場をとらない\*。この立場では、S—P を同じ語(たとえばホド)が受けていても、そのあとに助詞(たとえばノ、ニ)が続いたり続かなかったりで句の分類先が分かれてしま

---

\* たとえば松尾拾氏「へとガ」(講座現代語 6)では、従属句の種類ごとに整理している。

う。この欠点を補うため、S—P がどのような語に係っていくか、S—P を受けている語ごとに整理してみようと思う。

### 1. S—P 指示語文型

### 2. S—P ハ / ガ / ヲ文型

「カ」を伴う疑問文形式の S—P をコソ系の指示語で受けるか、直接ハ・ガ・ヲ・ニ...等の助詞で受ける場合で、先行句中の主語にはハ・ガどちらも現われる。その使い分けは単文の場合に準ずる。

○梅雨はなぜ起こるか、これはもうご承知の方も多いと思いますが、(I 37)

○人のためと思ってついたウソがはたしてほんとうに...よかったかどうかは、冷静に判断されなければならない。(II 5)

○これなどは...いかに言論というものが弾圧されてきたかを証明するものでしょう。(II 10)

### 3. S—P コト / ノ文型

形式名詞コトや、準体助詞ノで受ける形式で、句中の S は必ずガ主語となる。ハに置き替えると S の勢力はコト / ノを越えて文末述語に及んでしまい、全体の構文が違ってしまう。S ガ P コト / ノ形式は、コト / ノを境に主語の転換が行なわれる。

○私が入賞したのを(人々は)喜ぶ。

～ハ主語の場合は文末語に対応する。

○私は(彼が / 私が)入賞したのを喜ぶ。

なお、S ガ P が主語句となる場合、それを受ける助詞はハ・ガ共存で、単文の場合に準じ、発想の差がハ・ガの選択を左右する。

○警察の方がかけつけてくれたことがありました。(II 25)

○読書熱が...主婦などに広がってきたことは、喜ばしい傾向と言えよう。

○いわば、棒が曲がっていくのが気象現象で (II 70)

○私が凸版印刷に入社したのは大正 14 年 (II 28)

#### 4. S—P 普通名詞文型

S—P が連体修飾句として立つ典型的な形式である。S には通常ガしか現われない。ハに置き替えると、S の勢力は展開部を飛び越えて文末述語にかかってしまう。

○日本の若者がきょう着ている服は、パリでもロンドンでも着ている服なのである。(I 32)

○わたしが大学を出る前の年に地震研究所ができました。(II 61)  
ガがノに転ずることもある。

○午前10時から午後4時までに授業のある日が多いです。(I 5)

文脈によってはハ・ガの置き替えの可能な場合もあるが、ハにすると連体修飾句は崩壊してしまう。構文が違ってくる。ところで、文中・文末2つの述語に係る主語は、ガの場合

○私が知らない歌を(彼は)みんな知っている。

のように、主体に交替の見られるのが本来である。同一主体なら、ハを用いるほうが構文上好ましい。

○鳥が頭をもたげたあとは、その反動で振動を続けるが、(III 16)

振動を続けるのは、おもちゃの鳥自身なのであるから、むしろ「鳥は」のほうが適切だったと思う。

以上のように、連体修飾句を保持するためには、どうしてもガを用いねばならぬ。逆に言えば、ハ主語は連体修飾句中にははいり得ないのであるが、中立的な主語でなく対比強調の主語を表わす場合には、ハも用いられる。

○バスは通れるつり橋を造る。

では、「バス」は文末述語「造る」に係ってしまい、意味的にこのような文は成立しがたい。しかし、

○(ダンプカーは通れないが)バスは通れるつり橋を造る。

と対比のハにすれば、連体修飾句として成り立つ。

#### 5. S—P トキ / 場合 / オリ / トコロ文型

普通名詞の場合とまったく同じで、ガを用いねばならぬ。ハを用いると

S の勢力は展開部を越えてしまう。

○長男則雄君がまだ乳児のとき、大矢さんの夫は病死した。(II 15)

○筆者が紀要に欧文の報告を載せていただいたおりに、小冊子を持ってきた。

○島であるために、観測がしにくいところがありますか。(II 65)

「トキ / 場合 / オリ」等を受けて、あとにもう1つ主語が立つ場合、それが修飾句中の主語と同じ主語のときは、ハで受けることが多い。(ただし同一主語のときはむしろ省略するのが本来。)

○「適当にやりたまえ」と課長が部下に言った場合、課長はこの程度にやるだろうと思込んでいるわけです。(II 11)

修飾句中の主語は初出の概念であったが、次の主語のときはすでに既存の概念となっているゆえ、話し手・聞き手共通の話題としてハで受けることになる。

#### 6. S—P タメ / マテ文型

「タメ / タメニ / タメナラ / タメノ」と連用修飾句や連体修飾句となるが、どちらの場合もガ主語が立つ。ハを用いると展開部を越えてしまい、主語の交替も不可能となる。

○蒸発が盛んなため、降った雨はそのまま水蒸気となって大気中に戻るものが多く、(II 54)

○おとうさんが帰るまで待ちなさい。

#### 7. S—P ホド / グライ文型\*

S に P の主体が立つ場合はガ主語でなければならない。

○世間の人が想像するほど政治が家庭に入り込んではいなかった。  
(II 58)

○霧の中ではアイスクリームにはとても手が出ないほど寒かった。  
(II 35)

---

\* 「ほど、ぐらい」の機能用法差については、拙稿「ぐらい、ほど、ばかり」の用法'(早大語研紀要7)参照のこと。

S が P の対象語である場合は、前後の文脈によってはハの可能な場合も起こる。

○目をさらのようにして捜さなければ誤植が( / は)見つからないくら  
い、その校正刷りはよくできていた。(III 8)

ガをハに入れ替えることは可能である。

#### 8. S—P ヨウナ / ヨウニ文型

「ヨウ」を推量として用いる場合には、「ような / ように」両形式とも主題の置き方いかんによって、ハともガともなる。

○いつか見たイギリス映画にこんな情景が( / は)あったような気がする。(II 35)

比況として前件 S—P を比喻に用いた場合は、主題は後件の被比喻部分に置かれるわけであるから、S はガ主語となり、ハは用いられない。

○見かけは鳥が水を飲んでいるような動作を続けるわけであるが  
(III 15)

ハを用いれば S は後統述語に係ってしまい、「鳥は——動作を続ける」の構文として、主語の転換は不可能となる。

#### 9. S—P ナド(ノ)文型

「ナドハ / ナドトハ」形式は、ガ主語専用である。

○総長が行くなどもってのほかだ。

「たとえば総長自身が」と例として引き合いに出す意図であり、主題は他に存するという表現意識ゆえ、ハは用いられない。連用修飾句「ナド」、連体修飾句「ナドノ」は、ハ・ガ共存である。引用文と同意識で、単文の場合に準ずる。

○夏に比較的多く降るので、水が( / は)利用しやすいなどの利点がある。(II 55)

#### 10. S—P ト / トイウ文型

直接話法としてカギ括弧でくくられる場合もある引用文形式で、ハ・ガいずれも現われる。その使い分けは単文に準ずる。

○大きな地震が近くあると言ったのか...新聞発表がありましたね。

(II 67)

○あいまい語は条件語であると言った意味はここにあります。(II 12)

○この辺がくさいという常襲地が出ている。(II 67)

○日本語にはあいまい語が多くなった、わたしはこのように考えています。(II 11)

### 11. S—P タリ文型

ふつう～タリ～タリと重ねて用いられる形式である。異なる事実を羅列したり、2つの行為・作用の交互進行(ときには同時進行)に用いられる。同一主語の場合はハを用いるが、(その場合、2度めの～タリの主語はふつう省略される)述語の属性・動作の主体が主語となる場合に限られる。ガ主語は～タリの前後で主語転換が行なわれる。

○青春時代が戦争だったり、私がかけがえのない働き手だったりした...

(II 29)

### 12. S—P シ文型

ふつう～シ～シと重ねて用いられる形式である。これも羅列的に並列する形式であるが、羅列した事柄があとで述べる事実の理由・原因であることを前提とする表現である。比較的自由にハ・ガどちらも用いられる。

○あれは前例がないし、それでわれわれは非常にショックを受けました。

(II 68)

○きずは痛いし、病室は暑いし、とてもつらかったです。(初級 281\*)

### 13. S—P テカラ文型

ハ主語は～テカラを越えて後続用言に係ってしまい、ガ主語は～テカラで踏みとどまる。主語が交替するときはガを用いねばならぬ。Pには必ず動詞が来、動作の順序性を表わす。

○三四郎が美弥子を知ってから、美弥子がかつて長いことばを使ったこ

---

\* 早大語研初級教科書(新版)の用例。

とがない。(II 87)

#### 14. S—P 中止形文型

P の用言がいわゆる連用形中止法により展開するもので、～テカラに比べると動作の順序性の意識はうすく、～テに比べると並列意識・対比意識が強く、さらには原因結果の因果関係を示すものまで段階が見られる。ハ・ガどちらも用いられるが、中立的ハ主語の場合は後件述語にまで勢力が及んでしまい、中止形前後で主語の転換が行なわれないのがノーマルな姿である。後件主語は表わす必要がない。

○父はうちでもなかなかの雄弁家であり、…私たちが議論をふっかけることを好んだ。(II 56)

次の例のように主語が転換すると、話が飛びすぎて、班のメンバーはそれからどうしたのか、言い残しがあるような不満が残る。中止法にしては展開が大きすぎる。

○班のメンバーは横隊に並び前の方に設定した目標がある。(II 76)

ハを用いると、同一主語が後件にまで及んでいく意識であるから、述語も互に形式をそろえる必要がある。

○朝は食事の前30分、(父ハ)かならず書斎にかぎをかけ、ことりとも音がしなかった。(II 58)

「父ハ」を受けて「音をさせなかった」とするのが中止法展開の自然な姿であろう。

対比強調のハ主語の場合は、主語転換が行なわれ、後続主語の省略は許されない。

○おじいさんは山へ芝刈りに行き、おばあさんは川へ洗濯に行った。

逆に言えば、主語が転換しているにもかかわらずハ主語が立っているときは、対比強調のハと取っていい。ガ主語の場合は身近かの用言にかかりきりとなり、前件・後件で主語が交替するのが常である。

○それまでゆるんでいた心がきりっと引き締まり、能率が急に上がるから。(II 83)



## 15. S—P テ文型

この文型にはハ・ガどちらも現われるが、ハが立つ場合とガが立つ場合とでは発想が違う。

ハ主語の場合は、中立的主題と対比強調の主題と2種ある。中立的主題を表わす場合、～テの前後で主語の転換が行なわれるときは、後件主語は省略できない。

○彼のタワシはやがて飛ぶように売れだして... 正左衛門は自家用車を二、三台も持つような富豪になったのである。(I 54)

この文型は理由・原因を示す表現となりやすい。

後件も同一主体の場合は、後件主語はむしろ省略される。この文型は前後の意味関係によって並列・順次性・理由原因といろいろになる。

○宮城道雄は汽車から落ちて死んだ。

対比強調のハ主語は主語転換するのが本来で、もちろん主語の省略は不可能である。理由・原因とはならない。

○私は進学して、弟は就職した。

後件主語を省略すると「私は」は中立的な主語となり、後件も私の行為となってしまう。

ガ主語の場合は、中立的な主語なら、P テのところで主語の勢力はとどまるから、主語が転換しているにもかかわらず、後件の主語を文面に出さなくとも誤解は起こらない。

○日本では、毎年1回は大きい台風がやってきて痛めつけられる。

(II 63)

「台風が一痛めつけられる」の意味になる心配はまずないと言っていい。

○足が痛くて歩けない。

「足が歩けない」ではない。「私は歩けない」である。後件の主格は「私は」とハ主語が立つ。この種の文型は理由・原因の因果関係となりやすい。

○もうススキの穂が出て、高原はすっかり秋の気配である。(II 36)

強勢の排他主語のときは、主語の勢力が後件にまで及ぶから、同一主体

の場合にかぎって後件の主語は省略される。

○私が銀行へ行って、金をおろしてきましょう。

主語が転換する場合は対比の転位文となる。後件の主語は省略できない。

○私が銀行へ行って、弟が郵便局へ行く。

#### 16. S—P ニツレテ文型

この形式は、前件がガ主語で条件提示をなし、後件はハ主語をとって文の中心話題となる。前件は従、後件が主である。～ニツレテの前後で主語が転換するのが本来である。

○産業の開発が進むにつれて、水は多いとは言えなくなってきた。

(II 53)

○文明が進むにつれてアイディアづくりの精神はかえて衰え始めた。

(I 55)

同一主体の場合はハ主語となり、～ツレテを飛び越え後件述語に係る構文となる。

○彼は成長するにつれてたくましい若者となっていった。

#### 17. S—P ト / バ / タラ / ナラ文型

いわゆる順接条件法をなす文型の1つで、ト / タラは仮定条件にも確定条件にも、バ / ナラは仮定条件として働く\*。どの形式も、前件がガ主語の場合は主語の勢力は条件句でとどまり、結果句にまで及ばない。主語転換が行なわれるのがふつうである。

○液が上部の球の中にはいると重心が高くなって、頭を下げ (III 15)

○どこかにプラスがあれば、他のどこかにそれと同額のマイナスがなければならず (I 51)

○出張で1人が欠けたら、そのポジションはほかの人でうずめればかまわない。(II 80)

\* 拙稿「条件の言い方」(講座日本語教育 3)参照。

結果句の主格はハ・ガ共存だが、意味的に可能な場合は省略しても誤解の起こる心配はない。

○ああいうことがあると、神経質になりましてね。(II 68)

神経質になるのは「私たち一般の人」であって「ああいうこと」ではない。ハが主格に立つと、その勢力は展開部を越えて後件述語に係ってしまう、構文が変わってくる。

○先生は学校へ着くとすぐ研究室へ行った。

ハ主語は同一主体の行為となり、ガ主語は主体の交替を前提とする。

○私がしっかりしていなければ...と自分で自分に言い聞かせながら  
(II 24)

「私が」なら主語転換により「他人が困る / 皆が困る」等と予想され、「私は」なら直接「困る / なければならない」等に結びつくわけであるから、困るのは私自身となる。

#### 18. S—P カラ / ノテ文型

順接確定条件をなす形式である。前件は後件の前提条件であり、文の中心主題は後件にある。前件主格はガ、後件主格はハになるのがふつう。

○答え方がいろいろあるので、三四郎は返事をせずに少しの間歩いた。  
(II 90)

ガ主語の場合、主語は転換するのが本来であるが、同一主語の例もまれに見られる。

○私が最年長だったものですから、そんなときはいつも矢面に立たされました。(II 24)

同一主語の場合は、本来ハ主語をとって後件述語に直接係る構文となすべきである。

○美弥子は少し用があるから帰ると言う。(II 86)

その点、先の例文はガ主語としたために「矢面に立たされた」のは私以外の人物ととられがちで悪文と言える。主語転換にはガ格を用い、全体を同一主体で通すにはハ格を用いる。ハ主語はガ主語の上位にあり、ガ格表

現を統括し得る。

○駅へ来て(私ハ)定期券がないので、はじめて気がついたのですが、  
ガ主語は条件句の範囲内にとどまり、ハ主語は展開句へと飛び越えるのが常態であるが、ハ主語でありながら条件句の述語にのみかかりっきりで展開句へ及ばない場合がある。ハ主語でありながら主語転換が行なわれ、機能的にガ格と大差ないわけである。

○住宅地が / は郊外に延びてますからターミナル型はますます発達するでしょう (I 26)

カラ・ノデ展開は陳述の完結度がやや高く、ハ格の勢力を食い止め得る例もあるのである。

#### 19. S—P ガ / ケレドモ文型

逆接確定条件をなす形式である。この展開形式は陳述の完結度がかなり高く、展開度が高いため、前件にハ主語をとっても展開部を飛び越せない。ハ・ガ共存である。他の条件表現に比して、条件句・結果句に対する表現比重がむしろ逆で、条件句が主か、少なくとも両句きっこうしていると言えよう\*。そのためハ・ガ共存ないしはハ優勢という結果を示す\*\*。主語転換が行なわれるのは多くガ主語である。

○正月とか政変に人の出入りが多かったが、うちが選挙事務所だったこともない。(II 58)

○2200円というものが、あちらやこちらに動いたけれども、総額はつねに一定であった。(I 51)

ハ主語は同一主体となる場合か、対比表現となる場合が多いようである。

○来た当座は食べ物が違うためか(私ハ)少しやせましたが、このごろは日本食にも慣れて (I 23)

○お客様は遠くからでも買い物にいらっしるけれども、利用度は低い。(I 26)

---

\* 拙稿「条件の言い方」参照。 \*\* 松尾拾氏「ハとガ」に、条件形式別にハガの出現頻度数の統計結果が示されている。

その他の逆接条件形式としては、S—P モノノ文型がある。この形式はハ主語がよく立つ。前件に表現の重点が置かれる。後件は補足で、ガ主語。

○…と大矢さんは弁護するものの、あとに続く者のいないのがいかに  
も寂しそうだった。(II 18)

S—P ニモカカワラズ文型は、ハ・ガ共存である。

○めんどろな数式が多いにもかかわらず、初校は非常によくできており  
(III 8)

## 20. S—P テモ文型

逆接仮定条件形式で、ふつうガ主語が立つ。主語は転換するが、後件主語は省略されることがある。

○私が必死で抗弁しても、(父ハ)とりあってはくれなかった。(II 57)

○論文の原稿ができあがっても、まだ校正という仕事が残っている。  
(III 7)

あとの例はハ主語も成り立つが、強勢となる。ふつうハ主語が立つと、展開部を越えて後件述語に係ってしまう。ガ主語はもよりの述語にのみ係る。

○日本人は地震がぐらっと来ても平気な顔をしている (II 63)

## 21. S—P ノニ文型

逆接確定条件形式で、ガ主語を本来とするが、対比表現にはハ主語を用いる。主語は転換する。

○雨が降っているのに(彼ハ)傘もささずに出て行った。

○私は燭台まであげたのに、なぜあなたはそれを持っていらっしやなかったのか。(II 4)

中立的主題を表わすハ主語は展開部を飛び越え、主語転換を行なわぬ場合が多い。

○きょうはウィークデーだというのに(店内ハ)たいへんなこみかたですね。(I 24)

## 22. ～ハ～ガ P 文型

「象は鼻が長い」で代表される、いわゆる総主文型の他、ここでは広く

「～ハ～ガ述語」形式をとる文型について考える。まず発想上から次の7種に分類する。

- (1) 彼ハ背が高イ。
- (2) 彼ハ父親ガ医者ダ。
- (3) 彼ハ医者ガ職業ダ。
- (4) 子供ハ菓子ガ好きダ。
- (5) 今日ハ雨が降ッテイル。
- (6) 彼ハ私が教エル。
- (7) コノ学生ハ骨ガ折レル。

説明のつごう上、「A ハ B ガ P ダ」と記号化しておく。

(1) 彼ハ背が高イ形式

この文型は典型的な～ハ～ガ文型で、判断文「A ハ P ダ」の述部に、現象文(または転位文)の「B ガ P ダ」が収まったものである。「あの象は鼻が長い」なら現象文が、「象は鼻が長い」なら転位文が収まったものである。この文型では、B は A に所属するもの、A の内なるものであり、A・B は同一主体ゆえ「A ノ B ハ P ダ」と言い換えができる。

○彼ハ背が高イ。→彼ノ背ハ高イ。

述語には形容詞、形容動詞のほか、状態形容\*になる動詞+テアル/テイル形が立つ。

○彼女は目元がきれいだ。/澄んでいる。

いずれも述語が属性・状態表現となっているところが特徴で、その属性の主体がたとい文面に現われていなくとも、背後に予想される。

○その文学者は感受性が人並み以上にすぐれていたために、(II 8)

この文型で動詞がなまで述語に立つ場合は、状態性の強い形容詞寄りの動詞にかぎる。能力、習性、習慣、性質、本能、無意識行為という場合が多い。

○彼は足がよく上へあがる。

\* 拙稿「動作・状態を表わす言い方」(講座日本語教育4)参照のこと。

○このテレビは画面がゆれる。/ ゆがむ。/ 崩れる。

○うちのおじいさんは手が震える。

○彼は胸が高鳴った。/ 熱くなった。

○彼は手がスイッチに触れた。

## (2) 彼ハ父親ガ医者ダ形式

この文型は (1) の 1 種で、違う点は A・B の関係にある。(2) は、身体的にまたは構成要素として関係のない事物、互に異なる主体 A・B を、表現者の主観で仮に A を B の所有物としてとらえた表現である。B はあくまで A の外なる事物であるが、所有物や近親関係として「A ノ B ハ P ダ」と言い換えることの可能な文型である。

○彼ハ父親ガ医者ダ → 彼ノ父親ハ医者ダ

先の (1) 形式はドンナダという状態表現であったが、この (2) 形式は何ダという定義づけ的色彩がこい。述部には名詞述語のほか、動詞や打消表現がよく現われる。

○彼はおとうさんが死んだ。/ いない。

○日本はくだものが豊富で、(I 22)

外なる事物を仮に所有物として関係づけたものゆえ、どこまで関係づけられるかは主観的な面に依存する。

○彼はおとうさんが病気だ。/ 彼は大学がストライキだ。

は言えるが、

○彼は学校が早稲田だ。/ 彼はライターが外国製だ。/ 彼は犬が病気だ。

彼は飼い犬がシェパードだ。

となると首をかしげてしまう。この形式も A ハを強勢 A ガに変えることはできるが、その場合 B ガを B ハに変えることはできない。

## (3) 彼ハ医者ガ職業ダ形式

この文型は「A ハ P ダ」の判断文の述部 P に、転位文「B ガ C ダ」の収まった形式である。転位文ゆえ、B には「用言+ノガ」の立つことが多い。B は C の内容を具体的に示した概念で、「A ノ C ハ B ダ」の言

い換えが可能となる。

○彼ハ医者ガ職業ダ → 彼ノ職業ハ医者ダ

B は C の下位概念または説明概念であり、述語 P に当たる C には、抽象的な事柄の名詞や形容動詞的に用いられた名詞が立つ。

○この町は静かなのが特徴だ。

○彼は短気なのが欠点だ。

○この川は流れの速いのがとりえだ。

「～ハ～ノガ P」を「～ガ～ノハ P」にかえると構文が違ってしまう。

#### (4) 子供ハ菓子ガ好きダ形式

この形式も P に転位文が収まった文型であり、「A ガ P ナノハ B ダ」「A ノ P ナノハ B ダ」の言い換えができる。

○子供ハ菓子が好きダ → 子供ノ好きナノハ菓子ダ

B は述語 P の対象語であり、主語ではない。P の属性主体は A である。「A ハ P ダ」の言表がなりたつのはこの (4) 形式のみである。述部には「好きだ / きらいだ」等の形容動詞の他、「動詞＋たい / ほしい」「わかる / できる / 動詞＋られる (可能)」等である。

○先生は何がお好きですか。(I 61)

○彼は日本語が話せる。

B は A の志向・欲望・能力などの対象物という関係のみで、特に A・B 間に強い因果関係はない。「A ガ B ハ P」の置き換えはむずかしい。

#### (5) 今日ハ雨が降ッテイル形式

この形式は「A ハ P」の判断文の述語 P に、現象文「B ガ P」の収まった文型である。B は、A の場の中に存在する事物というだけで、特に A・B 間には深い因果関係は認められない。他文型への言い換えはできず、(1)

(2) 形式のように「A ノ B ハ」とは言えない。

○この教室は雨が漏る。(屋根ガ漏ルとは言えない)

○このへんはまだ森や畑が残っていて、いかにも郊外らしいところだ。

(I 8)



○北海道は雪が降っている。

個別的事実でなければ、1つの真理ともなる。

○夜はまぶたが重い。

○試験前は頭が痛い。

時・場所以外でも、話題をとり上げその状況を叙述するとき、この文型を用いる。

○(デパートの)都心型は高級品が多く(I 26)

○このバケツは水が漏る。

古い日記帳をめくっていて、

○去年のきょうは雪が降った。

#### (6) 彼ハ私が教エル形式

この形式は「～ハ～ガ」の両方が強勢表現という特異な文型で、弱勢の中立的主格にするなら、「B ハ A ヲ P」

○彼ハ私が教エル → 私ハ彼ヲ教エル

と置き換えられるものである。P には動作性の他動詞が立ち、B は P の行為主体、A は P の行為対象である。

#### (7) コノ学生ハ骨ガ折レル形式

慣用句を内に含む文型で、「A ハ P」の判断文の述語 P がイディオム表現である場合をいう。「A ハ」は弱勢の中立的主語である。

○今度の事件は手が込んでいる。

○この子は世話が焼ける。

○彼は腰が低い。

○むすこが大学に合格して、母は鼻が高い。

イディオムゆえ「B ガ P」全体で単一の用言と同じ資格を持ち、要素ごとに品詞分解しては意味がない。それゆえ、「A ノ B ハ P」の言い換えはできない。「母の鼻は高い」とは言えないのである。なお、「～ハ～ガ」は強勢としてそれぞれ「～ガ」および「～ハ」に一方を置き換えることが可能である。